



泰平此恩令



神皇正統記
三河屋幸三郎

9
1344



口仁9
1344

おと

たのひ



泰平れ恩

神田駿河町壹丁目拾遺地

三河屋幸三郎

堯の時にいづる一老人あり壤と
糞を曰井と糞を炊耕を食ふ帝
力我小治ていづやこれ遍く堯王乃
徳恵と紫を奉るる全身恩れ中に
つまじながるるを恩と辨へるるは
と真の水中に生じて出るも水は
貴しむるるに減る王者の民といふ



今や堯代の風化と崇つて尊んて
 二百有餘年干戈と刃も唯洗らふ物
 もくぐ分限お安んト衣食住のそふ
 結搦とそ一且唐の太和の種もま
 行ひつ不足の物もろく大安樂と得
 さしらの終一御治世の御言恩行成
 必くつこれと謝一奉らんやわら泰
 年の時々をばさそ上り先祖と初め

父母く事く考まるとかり下れ妻も流
 類と教育とろふ足て是全く
 御上の御言恩と有りこくな一奉り
 て御言恩及方端慎んで相守りべきと致ぐ
 掌のめきい却て其恩れ廣大からと
 不省唯慮くと巴が智恵才覚と必て
 活中とすもやうに心得皆お平の御言
 にしるく交易の便利なる事とと

つどろりか〜都鄙とひのふすまに飢うふ疲つ
 て死し可べ果きと莫も太たの沛たいに政せいにありく
 有あ難なんも多おくれ沛たい倉くら廩りんと固こりありく
 宛わ人じん大だい難なんと免まる事ことをあらはすり
 さらりきつ〜の宛わ函はん子しに送おひやる
 い皆みな我われくの沛たい教きょうふなりまあちち
 の沛たい吳ご見けんをあけ有あ難なん〜があらはす
 さらり〜と〜迎むかえ五ご教きょう正せい書しょ藏ざうとあらはす

書しよのいも〜とゆいの幸さいにあらはすり
 学がくの書しよも〜其その本ほん固ことあらはすり
 地ち固こ沛たい上じやうの沛たい倉くら廩りんとあらはすり
 賤せん山さん始し乃の幸さい若じやくに固こりあらはすり
 ままでと書しよ集しゆとあらはすり
 其その教きょうまま〜深しん切せつ〜とあらはすり
 其その書しよももなり且かつ童どう業ぎやうの解かい安あん〜んた
 其その書しよももなり且かつ童どう業ぎやうの解かい安あん〜んた
 其その書しよももなり且かつ童どう業ぎやうの解かい安あん〜んた

と實らひの折くもく々々畏敷の依り
 にあつたる時を御り機鬼の意と免
 らるるなりび身と依り家齊子孫長
 久の計もゆさくは外なるは是偏く御
 治世の御落なりされむ古の書より因て
 御り御因の御と相辯(我)が受得(一)御
 の家業(一)無(一)び(一)とつ(一)と(一)且(一)家(一)内(一)
 統(一)賧(一)ま(一)く(一)く(一)太平(一)と(一)樂(一)く(一)暮(一)る(一)べ(一)之(一)

に(一)さ(一)ら(一)る(一)事(一)は(一)御(一)の(一)世(一)の(一)つ(一)こ(一)れ(一)ら(一)る(一)ま
 や(一)あ(一)ら(一)る(一)れ(一)其(一)れ(一)なり(一)今(一)け(一)書(一)の(一)法(一)
 子(一)の(一)況(一)と(一)寤(一)御(一)執(一)あ(一)ら(一)る(一)御(一)由(一)
 一(一)く(一)遂(一)く(一)一(一)篇(一)を(一)と(一)て(一)因(一)て(一)太(一)平(一)の(一)
 御(一)り(一)御(一)り(一)も(一)御(一)る(一)子(一)孫(一)の(一)後(一)世(一)と(一)な(一)れ(一)
 の(一)御(一)り(一)も(一)亦(一)他(一)の(一)人(一)の(一)書(一)と(一)し(一)て(一)く(一)
 一(一)人(一)と(一)し(一)て(一)け(一)る(一)大(一)の(一)御(一)り(一)徳(一)と(一)あ(一)る(一)
 人(一)あ(一)ら(一)る(一)幸(一)甚(一)に(一)事(一)が(一)是(一)に(一)あ(一)る(一)

大平れ恩〜人の母のづ〜

身とゆきま〜家もら〜ん

大平乃恩き〜れい眞か〜

身も家も〜ゆ〜し〜れ

つ〜み〜む〜る〜人〜

津代乃眞〜い〜せん

泰平の恩

但恩澤猶雨露也

天下泰平の津も恩と謝〜

か〜し〜事〜の〜身〜

多く憚〜あ〜と〜と〜か〜れ〜泰平の

津代に〜と〜且〜竟〜舜の〜仁〜

二百有餘年干戈と見〜唯〜

ゆの〜し〜く〜分〜限〜に〜安〜ん〜ず〜る〜事〜

眞かに好〜ア〜そ〜う〜り〜が〜つ〜た〜事〜に〜あ〜

どや首のぐく 礼世にせしてん
湖夕毛草と事し 遠く那と遊と
隠れいづと ち身の 星洲もなく
山と海も 白岐の立田山 秋と
獨り行ぐたのなげ 白日といふ
親友そのうらぐれ 虚氣と地所
ゆれたる事も 安のふりなりさ
しれ 秦年の世れたのみと 常りに

んいりて ちれづるに 老て 乃
死る事と きらうと 云も 古の
人 礼世の時 のくく と云る
りふべー 郡康節の世代 謝詞
に 秦年の世ふ せと 秦年れ世
老い 秦年乃世に 死る 云んも 誠
あうかり 波黄虫の 幸に 味いと 知
ざらうぐく 礼秦年の世ふ せと 乃

秦年の世

〇

一

偽いつはりりまゝの心こころを理ことわりひらくおひとひとから事こと
となさげ立てたてを著かぞえおまへに事ことの
こゝろこころを多おほく相あひ改かへりその好あまいと
次つぎにまゝさう人ひととまゝしうにま
かり定さだまはし儉けん約やくは頗おほく海うみに
うかす
おにあんこの意いをいへり
馬車ばしややうとくまゝとくすか

されども心こころに徳とくにまゝして外とが事ことの
と徳とくにまゝと欲よくするは道みちがかりゆに
事ことと徳とくにまゝと欲よくするもその事こと
必かならず心こころと徳とくにまゝと欲よくするは
心こころを多おほく分ぶんかち仁にんの徳とくがう
へり礼れい儀ぎも忍しのびけ道みちにまゝ
ゆ事ことと徳とくにまゝと欲よくするは
樂たのし道みちにまゝと欲よくするは樂たの

赤年の目

しんで礼もべ態とつゞ道とある
まば礼もく楽もまべつゞをきと
以て我人の楽に真の樂ふつゞ
事成まべつゞをき必くつゞ
つりせん人よ人の人つゞ
理つゞ幻太和の元氣とつゞ人
のつゞ理つゞをき本の後つゞ
止つゞつゞ人の心つゞに天機

のつゞつゞて礼もつゞつゞの止つゞ
あつゞつゞとつゞつゞつゞ
易に百々甲つゞ用ひつゞつゞ
つゞつゞつゞ人常に私態に
いされては樂と夫つゞつゞ
かを獨つゞ賢者つゞ私態の
つゞひつゞは樂と得つゞ
つゞつゞつゞ人のつゞ樂あつゞ

あつべも 歎 草木もまゝに じ 楽あり
草木のちひきげを 花 咲 實 登るの
まばを 歎 け だまうとあまび 真の
天にうり 真の 測にむらも 皆く
け 樂と 得るなり 若 道と 學んで
け ち 依 け ず 人 心 にあま 樂と
ま び まゝ 外 物 に うま 樂と せ
くも 是 因 外 二つ かな 失うと 唯

私 慾のこころ くるめく 古人の言
も 天 様 觸 後 こと 事 たり
觸 後 こと 外 物 に うま 若んとか
こん 事 心 して 是 外 物 け 喜ひと せ
て 心 入 樂と とな くるめく け 理 必
亦 ち ち べ 是 代 ち 事 いま ち
ざれ 泰 平 の 世 の 真 樂 へ 得る こと
べ ね ち 人 生 の 陰 陽 として 遂 命

つり時として 患難にあひわつるも
 必しと 和樂と 考へて 禮記
 心中 志すも 和らぐ 樂しき 徳
 しき 心 生ず いて 天 地 も 陰
 陽 の 偏勝 に 因て 風 雷 等 乃 変
 じり
 富貴 福澤 へ 春夏 へ 道也 貧賤
 患難 へ 秋冬 へ 義也 故に 四時 へ

天ノ禍福ニシテ禍福ハ人ノ陰陽十
 リ是自然ノ理ナリ是以テ我心ノ
 陰陽消息ノ理ヲ辨へ知ルベシ
 此ととも天比ハ和氣と失ひたまらば
 頃令時世うつらひていつなる患難
 つひわつるも天命と安んじ自ら
 心と寛して必しと歎へば老も
 禍ハ足事と知らば大なるは

とのたまふをらむとて 志雅ふをりてい
志雅の北位より定むる 詩經も化山
の石以て清くかんてい 是の剣と磨
に磨りたる玉漬るんぞその磨ど粗礫
石ふらしてはて光明と為るべしその
人も心に念ふ順境をうるとにま
てはん珠光とぬるべし 運境に吹んで
子凍百凍して以て道光明と為る

べしとかり 師のまじく 仰つたまは
世との信塵及てらん 信塵く研草
とたりて 世ふ麻ふべき事もなると
是最親切なり 教をうらむとて 志雅に
まては 志雅の北位と案んで 必しと
歎くべし 衣衣に
うき事へ世はうらむとて 必しと
たのしみもあつて 行かげくらん

素評の題

昇平歌

文化長蒙堯代の風
乾坤行處不年豐
煖衣飽食堪安樂
擊壤歌傳四海中

文化し亥の冬 大に知常謹纂

に述

我たのふ何祈てらんかろく
民安うとともありんむらさぎ

け沖歌と常に行吟しそまらば
誠に沖仁心ふく其感慨おやれ
事一忘となぐりて洋しあれ
しくにちひゆるなり地ととも其
意味の深長うろとら海に我軍の如

く不仁なるもの寂ひききき
ゆげ美流人の中一人も感吟し
奉託人もあつた久家の勿論伍令
丈帰る向ひの家をりとも海會
一夜づつの家門うらも一統に輝
吟し奉託多きりれり

月日

昇平二百年家撃懐報報あり
あふめ書とくみく一人もく長
向ふ志成かふのけつべ剛す
君恩の極るがたあ一と謝する
に唐書り言れ雅儀い亦なんぞ是
と擇んや一日は友此書と持し来りて
余ふ志るは平是と園して感どう事
ありしつて柳り其後ふ書しつて

長平の月日

時に文化し亥乃冬湖東桐原以竹
村東時記漢で乾元舎南窓の下に
ちうん

湖東幡山

文化丙子春 涵養齋藏刺

神皇正統記
三河幸三郎

いろはらなま

一わがと、我の字なり我れ字はわが
ずる事、我の分なり分のれと累してわが
とらふなりまゝとわかれのかと略して我や
りうり則分の身なり是子と父母の
周よりりくわることたる養うりからぐはよ
身體髪膚これと父母より受りり教
授ひ傷らざるは孝の始なりと神託云

されり是は父母の遺物として我
私の物として事を知りて母の
形と見たり是も我見も書なりされ
古人も身も父母令ふて我とうむ
に我もまた心身も令ふて其根一
孝の終るなり是は孝の止る
所なり是は孝の止るなり我も
うむりなむ人のわきて送らるる

是は父母の遺物として我
我も我が父母も亦其父母ありと
れは我は父母の遺物として我
に是も一皮と見たり是は我の
前までも信實なり是は我の
神の通して惣然として我の
用は是れも毫末も我の遺物
ひの信は是れも毫末も我の遺物

仍ひそとと考ふもゆゑ孝徳もつらり
恒令考ふらびとて人の靈
父母とつらり一人もなき
祖伝の事なり是本と云ひな
に報ぐれば孝徳なり我生令身體父母
先祖を受得らば故より赤子孔子の所
門人に言ふとて人つらり常に其親
は之て至孝なり武時山林に入らば

おろし家々容あれて母なきらるる骨子と
らるる自分の指とて心骨骨子れん骨
いそり骨子母なり我とあしる事伝
多た骨子とて母伝同ぬ母の云く意
容ありしゆゑ我が指とて心骨骨子と
に接しや骨子同く天地の中に居て
一氣流通するの寒暑のそまに感ずる
骨子とて骨子とて人の骨とて

瘡疾の人の熱と毒とを以て凡そ私欲のなる
一併と備ふ事、於熱病瘡疾の冥器と
通してせざるが如く、支那子の肉の梅子の肉
きく清香と發するが如く、骨肉と骨の氣
と相連する一併の情を身に切らうけぬ
母我が指とからぬ、忽ち此の胸痛りり
母子の心相通ずるが如く、若者の情を
てそと山田繁雅子の奇ふ○よふ外

まゝも母と毒とを以て凡そ私欲のなる
一併と備ふ事、於熱病瘡疾の冥器と
通してせざるが如く、支那子の肉の梅子の肉
きく清香と發するが如く、骨肉と骨の氣
と相連する一併の情を身に切らうけぬ
母我が指とからぬ、忽ち此の胸痛りり
母子の心相通ずるが如く、若者の情を
てそと山田繁雅子の奇ふ○よふ外



一切の文字及び言法唯ひとりよく古と動し
 せんより展ふ獨てよと他されたりせんが
 いろはの文字一切の文字の母として是
 ちり壽がして一切のよとせんたり人と
 こまごま父母の周にありてほふみの形作と
 かりて玉得自並ふ用き伝ふなりなり
 びくいろはらうと草と類して以てま妙
 用とせん所成とありらんと歎するもれなり

そのちちも迫きと以て必しも忽ち志する日と事勿
 まく湖山の世まこくに事と執るゆるも
 れなりし

文化丙子春
 湖東幡山
 涵養齋藏刻

いろはの母

勢語臆新 契中郎著 全五冊

いせ物語と古書小考と待ふ社とこれ 古学 新刊 全五冊

玉のついで 本居大入著

古野物語 全三冊

遊仙窟抄 張文成 五冊

江村銷夏錄 六冊

四書集註 道春 十冊

百人一首 彩色奉書摺 箱入 一冊

石井行宣御御筆 土佐光貞朝臣画

觀音經國字解 月桂菴著 一冊

中将姫行状記 片方十村 七冊

同 一代記 後入 五冊

按摩手引 一冊

痘疫論 全三冊

同 方論 全三冊

同 標註 全二冊

同 類編 全二冊

京城書苑 文徵堂輯 都下諸名工ノ画ヲ集メテ 一帖トス

艸韻彙編 全廿六冊

元三大師御覽抄 中本二冊 小本一冊 抄本一冊

道二公 全三冊

狂歌野中水 得宗画撰 一冊

日かみこころ 一冊

日かみの巻 一冊

日紅葉集 一冊

狂歌手こころの花 文屋輯 一冊

眠の巻 全三冊

後撰夫曲集 全三冊

柳翁類題集 全一冊

狂歌家土屋 貞所 一冊

日松 一冊

日松 一冊

日松 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

增補醫方朗鑑 藥筆本 全一冊

世小医家方彙 書いさあれと

古方小方と又後世より或は

迂を考る方と多く出て必用とかく

ふ病よのこも甚患すおたりけ

方鑑古今方書中老老名家

効驗の要方奇案且減余の法と

祥小載て本書出所と附ありし

補小と十有餘條を考へて

改る丹家訂正は方とを以て

必用の之を板医方朗鑑と名けて

大徳懸隔の違おれし一板を

これ方彙中これ解と名けて

艸書日韻會 唐板船來板行

自漢至金名家艸書集今

同 標註 全二冊

同 類編 全二冊

京城書苑 文徵堂輯 都下諸名工ノ画ヲ集メテ 一帖トス

艸韻彙編 全廿六冊

自漢至明集名家艸書 華本 翻刻 近刻

同 類編 全二冊

同 標註 全二冊

同 方論 全三冊

同 痘疫論 全三冊

同 按摩手引 一冊

同 一代記 後入 五冊

同 中将姫行状記 片方十村 七冊

同 觀音經國字解 月桂菴著 一冊

同 百人一首 彩色奉書摺 箱入 一冊

甘藷糖 全三冊

眠の巻 全三冊

後撰夫曲集 全三冊

柳翁類題集 全一冊

狂歌家土屋 貞所 一冊

日松 一冊

日松 一冊

日松 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

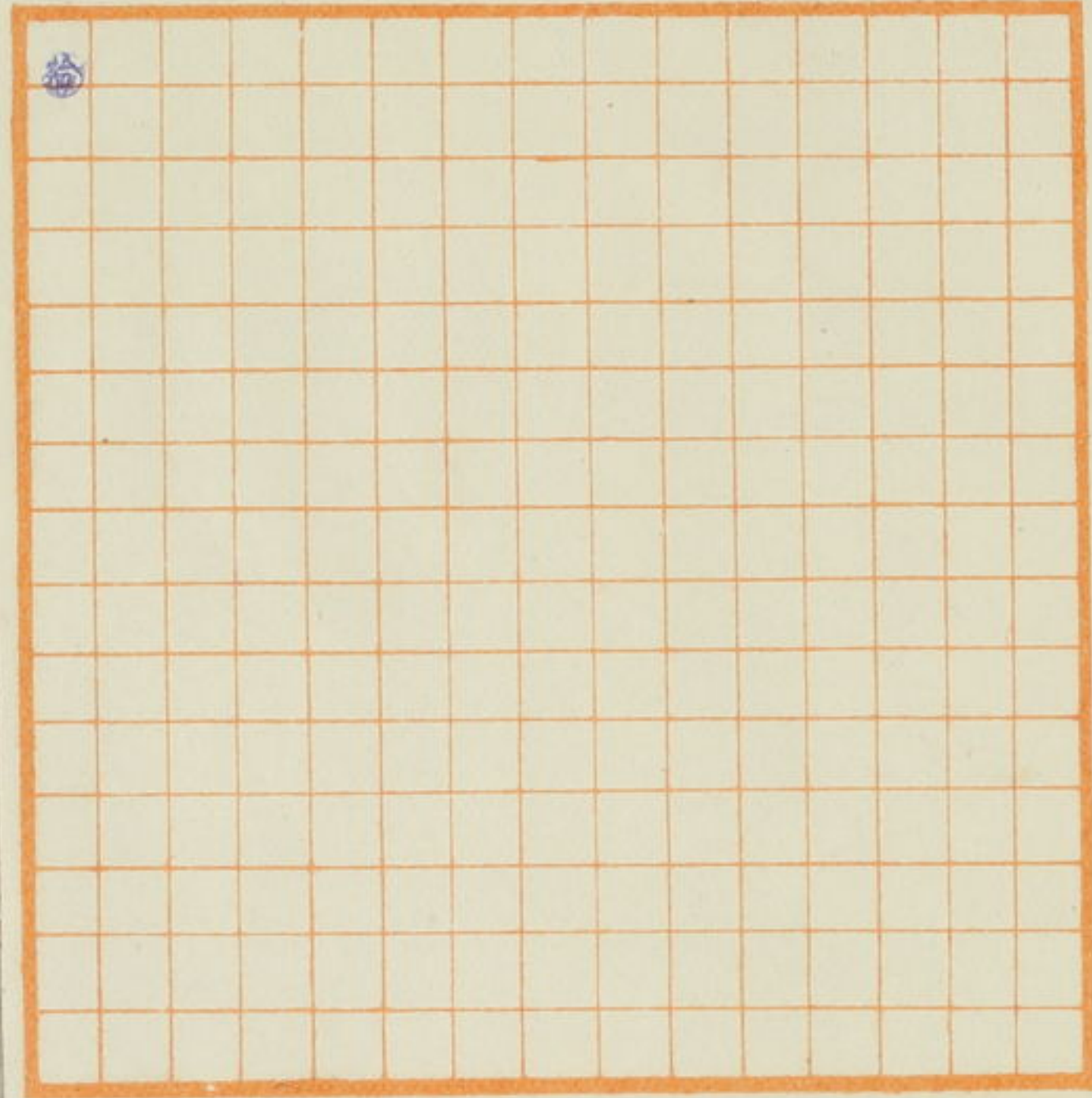
狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

狂歌類題集 一冊

4年10月



公事根元抄 三冊

後成恩寺因白兼良公所作
禁中年中此公事根元之
圖史流書とてその大略と
くさしに記しおひるさるり
同集釋 松下見林全三冊

年中行事歌合 全三冊

年中行事歌合を記して後合
ありしく板書と考ふるはし
判者ハ新中納言の書りなり

松葉百人一首千歳縁

女三十六奇仙伝抄

女今川増禮

女雛鶴用文

右各寸法中より女子の麦刈
りも方々記さるりなり

春秋左氏傳按本 秦鼎速
一五冊

百人一首小倉大全 一冊

金花百人一首 一冊

契仲古今集 自筆

董其昌武帝帖 一帖

王羲之十七帖 一帖

祝枝山千字文 一帖

古秀画譜 初編全一冊

八田古秀の画と山水人物
の画とをいふ画の分類

画図拾遺 全三冊

徒然草十首書 五冊

是れは所のつれくさるる傍に
そとそと初めんやんやん

春葉集 東備家集

漫畫百女 紙和画

狂歌詞の海 八五冊

狂歌のいふべきに事なきを
ことしく切らぬ歌のよみ
印せしむ 故にその流す
あしむれし初めを
あしむれし初めを

同俗名所坐知抄 全二冊

和歌の歌ふふあしむる
しるる名所を記し
てその所を記し
てその所を記し
てその所を記し

狂歌まの紙 全二冊

和歌のいふべきに事なきを
ことしく切らぬ歌のよみ
印せしむ 故にその流す
あしむれし初めを
あしむれし初めを

神田屋三郎

五
十
三
三

神田屋
三河屋
三郎